

居間の隅にあるディスクで地図を広げた、さあーてどこから手を付けるとすつかと言った表情、それもそうだ今は一市民、捜査に不可欠な警察手帳もない思案顔。

何か閃いたかポーンと膝を叩いた、妙案が浮かんだようだ、大学時代の後輩に週刊誌平成の記者早乙女浩二がいる、こ奴に頼んでみよう。

早速ガラケイ取り出しプッシュした、週刊平成ですの声。

一平は身分を名乗り早乙女さんをお願いします。

嗚れ声でお待ちーと受話器から聞こえて来た。

編集室らしく受話器から忙しなさが伝わってくる、程なくして早乙女が出た。

「早乙女浩二です」

と今も昔も変わらん声が返ってきた、

「おおー早乙女、俺だ谷端一平だ」

突如、一平の声に早乙女浩二はたじろんだ。

「良かった元気してるようだな、何かスクープでも掴んだか」

浩二はなおも戸惑っている。

「おいどーした声になっちゃらんぞ」

・：浩二は落ち着きを取り戻したように話し出した。

「大学の先輩で人生の先輩、はたまた数々の難事件を事無く解決、今は一市民と称してるが所轄はもとより警視庁管内きつての名刑事、そのデカさんからの電話だ躊躇ざるを得なかったよ、で未だスクープも取れん私に何用」

「電話じゃー何だ時間取れんかなー、居酒屋でちよいと一杯、どーだい」

了解、早乙女は一つ返事。

帳の頃、二人は京王線つつじヶ丘駅前の割烹しだやにいた。

「先輩ご無沙汰してんがな、変わりあらへんようだが白いものが増え額がどことなく後退」

「ハッキリ言うじゃん、小生変わりないと想ってんが、まー一杯といくかここは氷酒が名高い一合徳利に入っている、それでいいだろう、ツマミは壁と言う壁に品書きしてあるどれでもえー」

浩二は年齢不明なお嬢さんに魚介含めで三品告げた、棚に並んだ酒類の数々に目が止まった、希少な芋焼酎（魔王）がしかも素浪人と書かれている。

「この店は魔王が置いてあるんですね」

飲みたげな表情の浩二。

「あーあれか、あれは小生がお願いし置いてんのよ、これ飲み終わったらあれにすつか」
口緩み御馳走になりますの表情を浮かべる。

「ところでデカ長さん今日は何用で私に」

と浩二が切り出した。

「おっおいデカ長さんはよしてくんかな、一平で頼むよ」
相分ったと一平の猪口に氷酒を注ぐ。

「孫の出産で道央に赴いた、乗り合わせた機のCAさんに頼みごとを託されたんや」

CAさんの今日までを浩二に話す。

「やつばし一平さんは刑事やな、九年たった今も刑事魂とやらが抜けておらん、で何すりゃーえーんだ」

「捜査したくったって手帖は無い、ただ出向いてこれこれしかじかをお話し下さいって言ったって相手になってくれんのが落ち、せめて名刺でもと思う、そこでだ週刊平成の委託ルポライターとしての名刺を作りたい、どうだディスクに掛け合ってくれんか」

「何か掴んだら、いの一平に平成に」

「どー転ぶか分からん、状況判断して必要があればそーしよう」

浩二はスマホを手にしディスクに電話した、よく聞き取れんが何処をホツツキ歩いてんだと噂が伝わって来る、が幾分顔が綻んだ。

「会った事はないが一平さんをご存知やと、その方の願いでは致し方ない、で確信を掴んだら手前どもに寄稿を」と言いつつ一平の顔を覗いた。

小生、了解とも言い難い表情を一瞬見せた。

「早速名刺作るよ、そんであの噂れ声聞こえた、小生が編集室へ電話入れた時取ったのはディスクだったのか」

「正解、誰彼構わずあの調子で話しまくる随分と損していると想うがな」

その後古今問わず話に花が咲き続ける。

年齢不明なお嬢さんは知っている、鉄板に載ったどでかい和牛を持って来た、一平はもーそんな時間かと時計を見た、テーブルに肉片を置くと言い始める。

「浩二さんとやら、お若いのによくもまー一平さん流な語りが出来んもんやな」

「仕事柄極力標準語をと思つとんがいつしかこーなっちまった」

どうりでと一平を目視しカウンター越しに板さんにあいづち。

「一平さん後四半時でお開きですよ、ご飯と吸物を用意しますいっぱい食べて下さい」

浩二はこれとばかりに箸を付け始まる、ただならぬ食欲に一平呆然、一平は一切れ二切れ手を付けるのが精いっぱい。

雨垂れタッチで名刺を作った、「週刊平成 ルポライター 谷端 一平」

それに編集室の住所と電話番号を入れる。捜査聞き込みは気取らんと現役時代と変わらん小生流でええや、無

論、名刺だけでは相手にせんくれも多々やろ、ケースバイケースそれと無く話しかけこっちのペースに引っ込みめりゃしめたものと独り言。

久し振りにマキと共にホームグラウンドの鳥撮り場に、暖冬とは言え十二月だ薄手のダウンじゃー寒い、カイロを貼り付け園内をものほしさ多分な顔して歩を進める。顔見知りな鳥撮り猛者さんに出つくわす。

「よー素浪人、久し振りやないか鳥撮りはどうだね元気しとる」

といつもながらの挨拶。

「今日はお馴染さんだけや、何か良ー鳥情報はないですか」

「この先のハゼノキにメジロが来、下ではシロハラが地べたを突っついてたよ行ってみたら、川沿いの残り少ないハナミズキの実にヒヨドリに混ざりオナガが数羽とメジロ」

「有難うございます」

礼を申し述べてポイントへ。

川沿いのポイントには数人の鳥撮りさんが三脚を立てている、野鳥写真家として名高い叶山拓也さんも交じっていた。

「小学校中学校と机を並べた仲だ、小生はいつしかタクヤンと呼ぶよーになった」

フーンとマキが返事。

「野鳥の事なら何でも来いだ、草木もよー知っとる花や実も、勿論写真の撮り方だつて」

「自分、教さわろうかな、頼んだらいいとも言ってくれるかな、一平どう想う」

話し終わるとやおら近づき始め一言二言、タクヤンはファインダーから眼を離し小生を見コックリ、小生の許可待たずマキは勝手に機材を脇に立てた。

「話に聞く、常日頃素浪人と一緒に鳥撮りしているお嬢さんですか」

と言いながら昨今軽くてレンズ一体のカメラも出回り始めている、それでも野鳥は撮れる、が鳥撮りにはレンズ交換の出きる一眼レフ、それに長玉と頑丈な三脚は必需品」

マキが傍に立てた機材を見、タクヤンは言い始めた。

「カメラとレンズはアメリカの母（マーマー）だが」

「あつ先生面白いと言う」

何事も楽しく面白くせんとな、タクヤンは頭を掻く。

「この三脚、一応はカーボン製だが細すぎる、もっと太くしっかりした物でなければ、長玉にはブレは禁物これではブレを招じかねない」

「一平、今の先生の言った事聞こえた」

分かっているが如くコックリ、タクヤンは間入れず言い続ける。

「長玉は視野が狭い、直視出来てもファインダーには中々入れる事は出来ない、ならばどうする、点のような野鳥を見つけたら周りの枝等を確認、それをふまえ取り入れるようにする、言葉で言えばそういう事、が実際のところそう簡単にはいかない、要は慣れです。」

そんでファインダーに入ったら左手でそつと長玉を押さえ右手でシャッターをそつと押すようにする、そうすればブレはかなり抑えられます、あそこのハナミズキにオナガが三羽来ています、さあー撮って見て下さい」

一平は女流野鳥写真家のようなマキ、その仕草に眼を細めた。

「撮れたー、先生見て一平も見て自分がファインダーに取り込み撮った三羽のオナガさん」

一平は良く教えてくれなかった野鳥撮影、叶山先生直伝の教えにマキは嬉しさ満足度百パー越えている、その後もヒヨドリ、メジロと撮り続けた。

「間もなくお昼だ、午後から雑誌社と打ち合わせだ今日は終わりにする、素浪人達はどうする」

「我々も陣払いすつか」

マキを促しタクヤンに言った。機材片づけながらところで素浪人と叶山先生が言い出した。

「刑事魂が騒ぎ始めたとか、野萱さんが言っていたよ、何か事件性のある事故死を調べてるとか」

「そうなんだ先日奥さんから連絡が入って遺体のひつかき傷、脚のみならず額と手にもあった、と言っていた。終わり良しとせねばならんに向け動き出した」

「一市民がどー手付けたらいいかと思案中、明日からの小生を見てくれ、マキへの良きご教授、有難う」
マキも遅ればせながら言う。

「また宜しくね、ありがとうございました」

さー小生等も陣払いすつか、残る鳥撮り猛者さん等に挨拶しポイントを後にす。

馴染ラーメン店ののれんを潜った、らっしゃいのいい掛け声券売機で豚骨ベースを二枚。

「今日はマキちゃんも一緒かへ、そのトンボ空いてるよ」

出来上がりを待った、待つ間マキが問い始めた。

「叶山さんて上目線で言わず自分に合わせた言い方、ちょいとお腹は出ているが自分好きな野鳥写真家さん、惚れちゃうなー」

「おいおい小生がいながらほの字とは」

「一平だつてまりさんがいながら自分を」

と迫った。

「マキにゃー手も足も出さん、ガラガラポンじゃーないが皆一緒くたにすんな、何だつたら誘って下さいとメモ渡したら」

「つたくもー一平たら」

「もーもー、ここにゃー牛はいねー」

そーこーやり取りしてる合間をぬってお待ちーの声。

「仲のいい父娘さんだ事、熱っちゅー内に食べてくんろ」

大将が井ぶり二つカウンター越しに。この日もゆで卵が入っている一平は眼でござさん、大将も合わせるが如く眼で今日も来てくれてありがとう、食べて下さい。このラーメン店は一平が来ると常にゆで卵がサービスだった。

一平は道場門前でハイタッチしてマキを下した、マキはそのままつぐ道場に入り爺っ様、ただいまの声と同じして着替え稽古を始める、サンドバックに力の籠ったけりを入れる、マキを見て爺っ様は呟いた。

今日も鳥撮りで一平殿と何やらあつたようだな、あの鼻っ柱の強さは一平殿でも直す事は出来んのかな、と言いつつ見る眼は細めていた。

十二月二十日市内幼稚園で終業式が行われる、三十代の若き園長は教頭の柳田麻耶に挨拶をお願いされる、壇上に立つのを見定め園児に全員起立、礼。

「おはようございます」

園児達からはそれぞれに元気い返事が返ってくる。

「皆元気良いね、なぜ元気いいのかな」

「冬休みだもん幼稚園行かなくなつていいだもん、いっぱい遊べるしそれにクリスマスにお正月、ケーキ食べたりお年玉だつてもらえるもん」

園長はそれは良かったねーと話し始めた。

「テレビにゲームそしてケーキ、プレゼントお友達ともいっぱい遊べます、お正月には美味しい料理にお年玉に楽しい事だらけだね。だけど年が明けると園児の皆さん全員が一つ年を取ります。

冬休みは新年を迎え一つ年を取る準備期間でもあります、では準備期間とどう過ごせばいいかな、難しい事ではありません、お母さんお父さんは園児の皆さんが出来ない事は言わない、言われたら進んでやる或いは言われる

前にやる、そうすれば家の手伝いを良くやってくれる助かるよ、一つ年取ったんだ大きく成ったねとお父さんお母さん喜ぶよ、進んで家の手伝いをして下さい。それともう一つ二つ、知らない人に声を掛けられ、いい子だねー玩具あげるから付いておいでと言われても絶対に付いて行っちゃだめだよ。交通事故に合わない様にそれから遊び等でケガしないように、お父さんお母さんの言う事を守り大きく成長し元気に三学期会いましょう、終わります」

園児は各部屋に戻ったウグイス組の担任はマキだ、園児が言う。

「先生は家の手伝い何かしている」

「いい質問してくれたね、お爺ちゃんとお父さんと自分の三人暮らし、炊事洗濯庭掃除毎日やってるよ、口には出さるが二人ともマキ有難うの気持ち一杯だ、皆も家の事は進んでやってね、では三学期元気で会いましょう」

園長は先生方を職員室に集め極自然な挨拶をし始める、一人一人に給料明細書を渡し二学期最後の言葉を発した。

「先生方もケガのないよう気を付けて下さい、それでは三学期は更に華麗に加齢してお会いしましょう」
マキ等は顔を見合わせクスツとしたが複雑な表情をした先生方も。

一平はつぶくの窓際に陣取りHPアップ勤しんでいる、客が少ない日はこうして半ばさくら染みた事しばし。隣テーブルに置いたガラケイのルパンが早よー取れと言わんばかりに鳴ったマキだ。

「明日から冬休みです、連れてって何処へ鳥撮り行くんの」

「鳥撮りもだがどうしても翔平さんの転落死が気になる、明日は現場周辺を調べに行く」

「自分も行く朝は何時」

「鳥撮りと違うんや」

「自分も現場を見てみたい行くよ」

「相分った退屈すんなよ」

「時間弄ぶよーだったら鳥撮り猛者さんらと合流も視野しつてんが」

「つたくもー、小生は早馬Ⅱで先に行く八時頃霊園広場に集合だ遅れんなよ」

「そうこなくっちゃー、ガッテン」

気合い入れるか、腹底からの返事が返って来た。

一平は広場へ低いエキゾースト音と共に早馬Ⅱ（側車付BMW R75/5）を入れた。鳥撮り猛者さん等は一段落か出がないのか談笑中、早坂さんが寄って来た。

「いつもピッカピカだね手入れも大変と想う、ところでこのサイドカーのルーツは」

「新婚の頃本片は警視の小山田宗治さんと呼ばれた、所轄の反社会勢力の事件には必ずと言っていいほど小山田警視が来る、いつしか顔馴染になり小生と相通じるようになった、だが分らず仕舞いで小生、ヘマやっちゃったか捜査四課の扉を開けた」

「おおー一平君かそのソファーに座って」

「お叱りを被る時が来たな、だけど想いあたる事が浮かばん、警視は私物品だろうサイホンでコーヒーを二つ入れガラステーブルに置いた」

座るなり一平君、貰ってもらいたい物があると切り出した。

「わしも間もなく退官やいつまでも若くはない足腰労りつつの日も多々、BMWの75年型バイクもこれからのわしにゃーお荷になってしまった、貰ってくれんか持って行ってくれ、当然大事に乗ってくれるのが条件だが」

剛腕刑事と誉れ高い警視が年代物のバイクBMWを乗っていたとは驚きが、そこで更に譲ると言ってきたもんだ小生はキョトンとする以外の何者でもない。

「小山田警視、お待ち下さいお言葉を返すようですが、譲る持っていけと言われても」
口ごもるのも当然だ。

「小生、四輪は乗っているが二輪は自転車が精いっぱいとてもBMW R75何ぞ」

小山田警視は薰り高きコーヒーを飲みながら捜査の時と同じように相手の目線で、決して上から目線では物はない。

「一平君よ君の奥さんだが警視庁管内きつての女性白バイ隊員だった、今でもビックバイクに跨りツーリングに行くと言っている。ライディングが分からなければ奥さんに聞けば良い事、直ぐ上達する、又わしの所は倅達と二世帯住宅を検討中、話しまとまれば置き場所がなくなってしまう持つて行ってくれ」

「外ならぬ小山田警視の願い、後日お答えします」

ソファから立ち上がった、警視はドアまで来て見送る。

まりに話した。

「最高一、私も乗ってみたい狛市はここからはすぐ今度の休みに取りに行きましょう、ライディングは私が教える、一平なら一週間すりゃ一端よ」

小生がライダー、いつもならず一平の黒目はうつろ。

数日後のオフ日、フルフェイスの一平とまりはBMW R75を挟んで貸しコース上に立っていた、指導宜しく止まる曲が走るが出来るようになった、頃合いを見てまりは一般道指導、マアマながらも乗れる様になった、が一平に異変が足が突っ張ってしまった、マッサージ通い。

「こーなっちゃー小生ライダーは無理や」

なに言ってるの前向きで行けとまりは一括してきた。

数日経つがマッサージ通いは相変わらず。

「あのバイク、側車付にしよう、私のバイク仲間が側車製造販売している頼んでみよう」

「おいおい、これも乗れんのに今度はサイドカーかい小生の体バランスになっちゃうが」

「サイドカーは脚で支える事も倒れる事もない二輪より楽だよ、側車と取り付け費用は私が出してあつげる、電話すつからね」

一平の黒目はウツと発したような、同じして白霞がかかった。

一ヶ月が経った、コーヒーショップいづくの裏に車庫がある、セリカと淡いピンクのハーレーが寄せ合うように並ぶ、残りのスペースは黒に統一したサイドカー。

「どうこのサイドカー電動バックギアも付けといた、おおつかつこえー、振り返る人も多いと思う、さーオフの日に特訓です」

コーナーの体重移動もマスターし鳥撮りの足となった。

「早馬口のルーツ有難うございました」

早川さんはコーナーを攻めるが如く右に左に体重移動の仕草、ゴメンゴメンライスボール置き忘れ取りに戻った、予定より三十分送れてマキが、何時もの事やと一平ブツブツ。

浅間山への遊歩道を登り始めた保母さんに連れられて園児達とすれ違う、おはようございます元気のいい挨拶、オハヨーを返した、保母さん微笑みながら会釈、平日とは言え市街地近くにこの山、程よい散策路か数組とすれ違う。

キスゲ橋に出た、マキはここかとばかりにうすらルンルンで渡るも二人は両手を合わせた。

「ここで翔平さんが転落死したんだ、腰の高さまでしつかりした欄干がある、例え夜間とは言え落ちるとは考えられない」

「体調はどうだったの、弾みもある自分には今んとこどつちとも」

「小生、想うにのりちゃんの言によると弾みとか体調とかで落ちたとは考えられん、マキそれ以外に考えられん事はない？」

「襲われようにも夜は人は皆無、誰一人としてここには来ないし目撃者もない、だが人目は忍べる」

「そーなんだ、何か手がかりになるよーなのはないか、マウンテンバイクの塗料でも付着でもとさっきから見てるんだが八ヶ月経過してる無理や、ここは帰りにし山に登りキスゲの群生地に行ってみよう」

「ここが群生地？」

「現在は休眠中、地表面にはない、このどつかでキスゲと満月のコラボを撮ったんや」

「でも一平可笑しいよ、刺傷のような痕がと言っていたよね、柵内に入ったとてイバラなんぞ数えるまでも無いよ」

「そーだろう小生疑問を持った一つだ、坂を下つてもう少し先に行ってみよう」

女坂を下り水手洗神社前へ、右手は麓に通じ前方は前山へ、下つて来た、浅間神社のある堂山を迂回しキスゲ橋への道が、言わばここは交差点、帰路は迂回路に行ってみよう」

「一平、お昼にしよう」

マキは陽だまりを探し敷物を広げ得意のジャンボおにぎりを二つ、おしんことアスパラのベーコン巻きを並べた。

「でつけーライスボールだ、と言いたげに今左に行った人ヌツとした表情してたよ、次の散策者はどんな顔すつかな」
等々言いながらランチタイム。

「早坂さんが言ってた事だがあの夜モーター音の様な音、十五秒程聞こえた」と

「それって、モーター音の様な音ではなくてモーター音じゃないか一平どう思う」

「じゃーモーター音だったら如何とす」

「ラジコン音ではないか、何時だったかカイ君のお父さんが保育時間外に園庭でラジコンヘリを飛ばしたの、上下昇や宙返り、後進やら自在に操縦し先生等の眼を引いていた。

鮮やかに舞うヘリはモーター音が妬けに耳につく、確かな事は分らんがあ音は静寂な夜は離れていても良く聞こえるのでは」

一平はにぎりパクつくが眼が点になりつつ、マキの言をキスゲ橋とオーバーラップさせている、がやおらマキに言った。

「そのカイ君とか言うお父さんに会えんかな、ラジコンの事を聞きたいんだが家は何処だ」

「電話してみる、留守かな出ない少し経ったら再度電話してみます」

スマホを切ろうとしてた時つながった。

「お待ってしました大越です」

「ウグイス組のマキです、突然電話して申し訳ございません」

大越さんは慌て気味な声する。

「マキ先生どうしたのゆつくり冬休みを始めたのでは」

無理もない担任が園児の家に電話、誰しも何事か、我が子に何かがしかも冬休みだ。

「びつくりさせてごめんなさい、自分の知り合いがラジコンに興味を持ったの、でお父さんからラジコンの話が聞きたい、可能であれば時間をとって頂きたいのですが」

スマホから安堵の表情が伺える、カイちゃんのお母さんは落ち着きマキの問いに答え始めた。

「先生、取り乱しちゃってごめんなさい」

いや自分の方こそ突然の電話失礼しましたとマキ、カイ君のお母さんは言い始める。

「主人は今日は定時だから六時四十分には家に戻ります、道草せず帰るようにと言っておきました」

マキは一平を見コックリ、一平も有難うの如く肯いた。二人は半分ほどになったライスボールをパクつきお馴染さんながら野鳥を眼で追っていた、シジュウカラの群れが来た。

「群れには良く他の鳥が交じっている事が多い、色形似通っていて分からん事もあるがよく見てりゃー気付く」

「自分は鳥撮りに同行するようになって何年になると想う、中三の時だからもう十二年、一平より野鳥は知ってるかもよ、っあッゲラ（コゲラ）が交じってる、今梅の木に移った三羽はエナガ」

あいやゴメン、そうだったなもーそんなになるかと一平。

ジャンボおにぎりが終わった、マキは紅茶とタッパに入った津軽産リンゴを出した。食べ終わり鳥見しながら迂回路へ散策路は平たん、左に大きく曲がる中程で上り坂の遊歩道が。

「ここはまっつぐな上り坂、先程は緩い坂女坂こっちは急な坂ゆえ男坂、登って行くと浅間神社に着く、このまま迂回路を行くとキスゲ橋に行ける」

二人は橋を再確認し橋下に移動、記号のようなのは残っていないか探した、がいささか月日が経っている見当たらない、三十分程経ったがこれと言って新たなものは確認出来ず、マキに促され鳥撮りポイント方向に、二人の鳥撮りさんが三脚を立てている、さっぱりと両手を開き首を竦めた。

こっちはコゲラとエナガと言った、会釈し霊園の広場に、皆テーブルを囲み談笑中。

「ご両人お帰りになったな」

誰とはなしに声がした。

「常連さんのみや、おかげ様と言うか十二月だが暖かい日差しのもとゆっくりライスボールパクつくことが出来た」

「こっちの今日はダメや、こうして鳥談議に花が咲いてしまっている」

野萱さんが煎餅放り込みながら言う、一日いても鳥撮りはこう言った事は度々の様だ。

三鷹市中原の大越宅に少し早めだが早馬口を止めた。

「主人はもうすぐ帰って来ると想います、お茶の用意しますからここでラジコン眺めていて」

庭には芝生が植えられその奥にプレハブが建っている、カイ君がマキ先生こっちだとプレハブに案内してくれた、入るなり一平は目を丸くした、所狭しとラジコンの数々、車も船もあるが断然ヘリが多い。

「お茶が入りました」

とカイ君の母親がお盆に茶器を載せ入って来た、

「カイ、向こうへ行つてなさい」

「お母さんいいじゃないの、今日は難しい話じゃないし、カイ君いいよ」

とマキは言う。

「先生ったら」

と言いつつコーヒーを入れ始めた、カイ君がゴズゴズタイヤのラジコンカーを持ち出した。

「これ僕の」

と言いつつガーデンライトの下でバギーを巧みに操縦した。そうこうしているとカイ君の父親恭平氏がお待たせしましたと入って来た、二人を見、恭平さんは怪訝な表情、二人の関係を知っている奥方が説明、すぐさまラジコンを眺める表情に戻った。

「お疲れの所お邪魔させて頂きました、でもこのラジコンの数ちょっとした店を負かしてしまうんでは、何台いや何機、どの位あるんですか」

「数えた事はないんだが百機は下らんだろう」

「一平さんよくぞ来てくれました、もういい加減に増やすのはやめて下さいと言っではいるのにいつの間にかやら新型が」

「お母さん、男ならば幾つになってもロマンを求め続けているもの、小生も野鳥さんを求めデジカメ様のお供が常、そしてサイドカー、楽しみ事があつてこそ明日へのエネルギーです」

「一平さんいいこと言ってくれますね」

その通りと大きく肯く。

そんなやり取りを目の当りにしたカイ君のお母さん、これやー二人とも重症とばかり諦め調子。

マキが言い出した。

「お父さん、ヘリのモーター音を聞きに来ました、一平何なりとお尋ねになって」
ではと言いだした。

「ヘリのモーター音から聞かせて下さい」

恭平は二尺程のヘリを中段の置き場から出し芝生に置きプロポを操作、金属的な音共に上昇を始めた、想定外な音に一平は興味を示した。

「静かな所であれば煩わしく想える人も」

「はいそうです、物珍しく見る人もいますがとかく夜間は近所迷惑になり兼ねない、夜間は飛ばさないように心がけています」

「ご心情をお察しますが音を録音させて下さい、後一分ほどお願いします」

有難うございました、録音を終わると恭平さんに声を掛けた。

「恭平さん、飛ばすのは容易ですか」

「プロポが3chなら容易と言えば容易とも言えるが楽しみは半減、アクロバティックな動きが欲しくなる、そうになると4ch以上が必要、練習を重ねれば飛ばせるようになります。今ではカメラ搭載も珍しくありません。又高価ではあるがコンピューター制御の自動操縦も可能、打ち込んでおけば勝手に返ってきます」

「動きとか小回りが利くとか機敏な動きはどう」

「8の字飛行はお手の物、背面飛行だつてスピードは外国ではフリーウェイを走る車とプロポとか、狭い所ではローターが触れてしまう難があり機敏性も今一」

「どのくらいの重さまで搭載出来る」

「テレビ局のカメラとはいかないが5kg位の小型カメラを搭載可能、災害の被害状況等確認にも活躍するようになった、今は四枚のローターを持ったドローンが主流です」

「そのドローンとやらは」

「過疎地へ食事を運ぶ実験も始まっている、ローターにカバーがあり多少障害物に触れてもヘリのように即墜落はない、

が人の手足のような機敏性に欠けます」

「機敏性に欠けるならば人を襲う事は不可能」

「コーヒーが冷めちゃう頂きましょう」

カイ君のお母さんは現役時代の口調になった一平に、入れたて香り良きコーヒーをすすめた。一口頂き一市民の一口調に戻る、が問い始めた。

「ドローンで人を襲ったり傷付けたり危害を与えたりは出来ますか」

「お年寄りや子供は動きは遅い、そう言った事は出来るやもやが若者や運動神経抜群な人には無理だな、先も言っただけだ。後退したり突っ込んだりは無理」

「ならばドローン二機もって襲ったら可能だろうか」

「実際その場に携わった事も無いし実例も無いが可能性は皆無とは言えない」

「可能性、ない+ないはイコール、あるだな」

一平はブツブツ。

そんな一平を心得たもん、マキは座を取り仕切るが如く雑談を始めた、一平もマキに引きつられ加わる……。

「マキ先生、先生が常日頃仰ってた〇〇亭の〇〇ラーメンです、今届きました食べて下さい」

「お母さん」

と声高々にマキが言う。

「マキ先生が美味しいといつぞやも言ってたじゃないの、それを出勤しただけです」

戸惑うマキを横目で一平が。

「頂こうじゃないか冷めちゃうよ」

一平は、先生と園児の関係もあり戸惑っているのに知らんぷりと言いたげ、カイ君の先生食べてに誘われ徐に箸を。

週刊平成の名刺にガラケイの番号を記入した、一平は恭平さんに渡し二人は大越家を後にする。

十二月二十一日三鷹署刑事課では朝会が行われていた、課長の村上裕太郎がディスク脇に立ち訓示中。

「今月は目立った事案はない、隣接する所轄ではオレオレ詐欺が頻発している、管内でもいつ起きても可笑しくない又受け取り方法も巧妙な手口を使い始めた、共同住宅の空き部屋を利用して受け渡しもされている。年末にはひったくりや恐喝も起こりうる銀行や郵便局、コンビニ等警戒を怠りなく、交番や駐在所に徹底させ巡回を怠らないよう。以上」

部下に対するその姿は、柔術道北野流村上家の道主やマキの尻に敷かれた裕太郎とは違って凜としたデカ長だ。

翌日、何時もの様に一平はいつぶくの窓際でキーボードを叩いていた。

「こないだの葛西臨海公園でのジョウビタキさんUPしてんの、葉の花に止まったところ絵になるよね、だけどバックが今一やん、ロープが入ってたり立木が、これなんかどー」

「マァーマァーだね」

「グッドマーク付けてくれんかの」

「何時もそー聞くからそー答えただけです。UP終わったら飯島班長さんが振り込み詐欺の事を言ってた、何とかと言っていた、終わったら教えるからね」

一平は今話せとばかりに手を離しさらに振り向いた。

「ダメ、ジョウビタキさんUP終わんなきゃーマキちゃん可哀そうだもん」

このーとばかり雨垂れタッチなれど打つ手が早くなった。

「終わったぞ さあー話せ」

「おやまあー早い事、ほんとにUP出来たの」

「ほれこの通りや」

PCをまりのいるカウンターへ。

「それは管内富士見町の共同住宅で起こった。空き部屋が受け渡し場所だと金額も途方もない金額だった、合鍵でも持っていたかピッキングやら、どなんしてこの部屋を指定場所に出来たか、捜査中だと」

一平は黙り込んでいた。やおらPCを片付け出かけてくるとまりに伝えた。

早馬（自転車）に跨り走らせる、共同住宅は閑静な住宅の外れに位置し隣は僅かながら木々が。

「これじゃー班長さんも手こずる事うけあいや、昼間でも人通り無し、おまけに木々に遮られ道路からは良く見えん」
五部屋づつの二階建て、築三十年経っていると聞く、がりホームが行き届いているのか外観からはそれを感じさせない、一平は辛うじて全室の窓が見える場所を探した。

大ききからしてワンルーム仕様だ、近くに大学がありそれが肯ける。一階に二部屋、二階に一部屋がカーテンが下がっていない、カーテンは入居者持ち故そこは空き部屋。

それらのドアノブを回してみた、いずれも鍵が掛かっている、不審者と想われてもなんだ早々に退散。塀に仲介業者の看板が掛かっていたそれを見一平は調布駅前に向かった。

窓には物件が所狭しと貼られている。

「いらつしやいませ、お部屋探しのお手伝いをさせて頂きます」

一平は週刊平成の名刺を出した、事務員は戸惑いながらも言う。

「どのような物件をお探しですか」

「あいや物件探しではないんです、お忙しいところ恐縮ですがオレオレ詐欺があつた共同住宅についてお尋ねしたい」

「はい分かる範囲でお答えしましょう」

奥から四十絡みな男性が出て来た。

「こちらへどうぞ」

と椅子席を進められた。

「店長の堀江です」

と名のつた。

「社の方針であの事件を調べています、あのような事があつた後はいかがですか」

「あの日からあそこの物件は動かなくなっていました、困りました」

「それはお困りでしょう、早速ですが空き部屋の鍵等管理は如何されていますか」

「大家さんが一つと手前どもが二つ持っています、札を付け鍵付きの箱に他物件と一緒に管理しています、入室希望者さんが部屋を見たいといった時、箱から出して物件へ向かうようにしています」

「気を悪くしないで下さい事件当日、鍵は壊されてはいない合鍵による犯行ではと、持ち出し出来るのは誰がいますか」

「私と受付を含め六人います、持ち出す時は鍵箱に入っているノートに記入する、使用後は複数人以上で確認のハンを押す、又日々閉店時は鍵台帳と照合、この時も複数人以上で確認ハンを押す様にしています」

「二重にチェック、失礼なことをお聞きしまして申し訳ございません、ならば大家さん」

「よくあの人に限ってとか言われますがあの人はそのような人ではありません。何だったらお住まいをお教えします、こちらです」

と堀江店長はメモ書きを一平に渡した。

「ピッキングだが、木々に遮られ人目を避ける事も出来るが自然体に乏しい、空き部屋を受け渡し場所にする為此この部屋をどういう風に探し使用できたんだろう」

「簡単です、ご存知かと想いますが窓にカーテン掛かってなければ空き部屋です、後は住所と部屋号を調べれば良しですが谷端さん、受け渡し場所にするには入居者に成りすます必要があります、でないと怪しまれる事も」

「そーなんだ、それが引つかかる、他に何かお気づきは無いでしょうか」

「これと言って見つかりません、共同住宅をこの様な使い方をされるのは入居者はもとより手前どもも近隣にお住いの方々も困ります、お巡りさんも犯人逮捕に全力で取り組んでいます、マスコミの方も逮捕にご尽力をお願いします」

「畏まりました お忙しい中、時間をとって頂き有難うございました」

早馬をいっぶくの停車場に置き徒歩でつつじヶ丘に向かった、しだやの暖簾をくぐった、いらっしやいと年齢不明なお嬢さんの声、魔王のロックと魚介類の肴で、チビリチビリンと・・・、して程よい茶碗にご飯がごっさんし帰館。

「今日も体に良ー動きたヒートテックがきいていたか身体がべとつく、汗を流すとすつか」

夜具を用意し風呂に、四枚蓋をとった、あつ小声を発す。

「そーか今日は冬至か」

湯舟に浮かんだ三個のユズを見て言った。

翌朝まりは台所に立っていた、五時半一平も起きて来る。

「もー起きてんのか、いっぶくをかたづけ風呂に入れば日付変わっちゃうだろ」

「御心配には及びませぬ五時間はしっかり睡眠はとっています」

「五時間じゃー足りんだろう小生、七時間は寝なきやーあくる日はアウトや」

「一平がサツと朝飯食べてくれればいっぶくの開店まで四時間あります、さあーできたよ食べて」

朝番組を見ながらエノキにタマネギの入った味噌汁に一口付けて卵かけご飯、ハクサイ漬けをちよいとつまみ一平はまりに話しかけた。

「例えたならばだが刺され絶命を予期した時、周りには誰もおらん、ならば時の状況を誰かに伝えたい時、まりだつたらどーする」

不意の問いに揚げドウフをワサビ醤油に付け口に入れたまりは口さあーモグモグ。

「急にのど詰つかえちゃうじゃないの、トウフで良かったけれど」

「いやーごめん」

「気の続く限りどんな方法でも状況を誰かに伝えたい、私だったらそーするな」

「そーか小生もそーだ、五月に翔平さんが転落死した場所に血痕に交じって鮮血で書かれ暗号めいた（リと、乙）、これどー想う」

「誰かに伝えたい一心で書いたものと思う、薄れて行く意識の中、文字のバランスも崩れ伝えたい事も半ばまでも行っていないのでは、（リと乙）は離れて記されているが一字ではないか、井の字とか女とか」

と話し終わるとまりは揚げドウフに刻んだネギを載せ口に放り込んだ。まりの言に黒目をぎよろつかせたがすぐさ何時もの一平に戻った、なぜならば朝飯は一日の始まり楽しく食せんきやーと常日頃言っている。

窓際に置いてあるパフィオに水をやっているといつぷくに行きますとまりの声、小生も後ほど行くがと一平。

熱く渋ーいお茶を嗜みながら一平は戸井、酒井等々あるが井桁と想える字が先に来ている、除外し井田とか井上とか、井筒や井藤、・・・。

はたと早馬口に跨った、のりのCA仲間松坂里英が言ったワンルームマンションに赴いた。ジブリの森に近いタイル張りの二階造り、満室の様だカーテンは全室下がっている、塀に管理事務所の看板がありJR西荻駅前と記されている一平は向かった。

誰にでも眼につくような場所なので直ぐに見つかる、客駐車用だろう少し空いていた、ギリチョンで早馬口を停めた、名刺を出しお手隙な方がお出ででしたら空き部屋情報をお尋ねしたい、奥からかつぷくの良い男性が現れた、所長の川島浪男と名のり名刺を、双方あつと声を発した。

「デカ長さんではないかご無沙汰しています」

所長は久方振りに会えた友の様な挨拶をした。

「今は一市民です、デカ長はやめにしといて下さい」

一平も照れくさいような挨拶を返した。

「で、今日は空き部屋情報を聞きたいとか、デカ長さん用にお探ですか」

「あいや、話せばちよいと永くなるなご都合は」

アラフォーと思しき女性が言う。

「所長、ここは私達にお任せ下さい、この先を曲がった右側のコーヒーショップ、オープンしてると想います。ごゆっくりどうぞ」

ありがとうございますと所長は礼をし一平と外に出た。

ここはコーヒーショップだレミーマルタンは置いてないよ、キューバでいいかな、一平に声かけた。

「いいとも」

品書きに眼通さず返事した。

「十五年程前かな中野店で営業してた頃、駅前で三人の酔っぱらいに絡まれてしまった、そんな時、君達何しているんだと三人を睨んだ、難なく三人から解放された。その時のデカ長さんを今でも忘れはしません、今では所長に収まっていられるのもそのデカ長さんお陰です」

「おいおい先も言ったように一市民だ一平でいいよ」

「はい、そのように呼ばせて頂きます、今日は単なる部屋情報調査ではないようで」

「お察しの通り、警察手帳は無いし手ぶらで調査も無いだろう、名刺は後輩に頼んで委託ルライターとして作った、無論特ダネにつながるよーならば情報を提供する約束でな」

で何を調査しているんですか所長は一平に尋ねた。

「五月、新婚の松下翔平が浅間山入り口のキスゲ橋で転落死した。十一月末、道央へ行く飛行機内でCAで新妻の範子さんと出会った」

のりの言と今までの事を話した。

「あらゆる面から捜査を始めた、今回はジブリの森近くのワンルームマンション」

と一平は切り出した。

「吉祥寺駅にも近く満室状態だったが四月続けざまに二部屋空いてしまった、五月に二階端から二部屋目が埋まったが端っこは六月末になってしまった。等々あったがお陰様で今は満室」

「人気の物件の様だが一部屋、空室が出来た訳は」

首を傾げながら川島所長は言い出した。

「端っこの部屋は今でもどこか変な気がしてならない、地の利も良いしこの部屋気に入った、けれど返事は一ヶ月待つて頂きたいと言いポーンと十万円を置き三屋と名乗った。現金は困りますと担当者は言ったが人目を避けるかのよう
に立ち去った」

「その後どーなった」

「一か月にならんとすんが音沙汰なし、やむなく入居者募集を掛けた、現金は今でも吉祥寺店で預かっている、三屋さんは一向に来ず」

「その三屋とか言う人物はどのような人」

「私の所は各店舗入居者管理が主で個々には分かんないが現状、吉祥寺店、後山店長に聞けば分かるかも、連絡とつて見ようお待ちを」

川島所長はスマホを取り後山重久店長に電話を入れた、営業の里山理沙がとった、午後二時には戻ると想います、そう返事してきた。

「小生は二時に行くと言えてくれ、良かったら川島さんもどーだね」

「アラフォーさんのお許しを得れば行くよ、里山女史に会いたいのので、四月に入社しすぐさま持ち合いの知識と笑顔と行動力で先輩と肩を並べた、仕事ぶりを間近で見たい」

「川島さん相変わらず、女史と会えるが本音やな、アラフォーさんに怒られても知らんよ」

「デッデカ長何言うて長さんに協力したいが為です」

じゃー二時をちよいと回った頃ハーモニカ横丁入り口でと二人は別れた。

三人は吉祥寺の微かに今風な曲が流れる店の円形テーブルを囲んだ、谷端一平と名乗り里山理沙に話しかけた川島所長から事情は聞いていました、はいどうぞと。

「五月、ジブリの森近くのワンルームマンションへ部屋を見に入居希望者を連れて行った、その時の状況を知りたい」

「はい、営業の里山理沙ですと名刺を渡しました、あっそうと受け取りポケットにしまった、ご案内しますと声を掛けピッカピカに黒光りした靴にグレーの縞の上下、メガネはいかにも高級品のような縁が付いてソフト帽を斜に被っていた地下の駐車場があるのでそこまで徒歩で、店の軽自動車助手席に乗せ現地へ案内しました、着くまで世間話等を話かけました、興味が無いのかハーとかエーとか会話にならない返事ばかり、着くと」

「何処の部屋かね」

と気取った言い方で聞いて来た。

「上目遣いで言い如何にも見下した言い方だった、はい直ぐお見せいたします、直ぐ鍵の用意します共同郵便受けの奥まった所の縦棒に取り付けられた部屋鍵の入った箱の番号を回した、この時今迄は距離を置いていたが私の直ぐ脇に来て私の手元を見ていました」

川島所長が言ってた、持前と言うか齒に衣着せぬ言い方で説明し始めた、今風な装いも板についている。

「ドアを開け頭上のブレイカーを入れ室内に、右側に台所左はウォシュレット浴槽が並びその奥のドアを開くと八畳

のフローリングになっています、左手前にクローゼット、窓は一枚の引き違い戸そしてベランダとなっています、無論エアコン装備。私は順に説明しました、が入居予定者いや三屋さんは質問もなくふんふんと肯くのみ、更に何か質問はございませんか、その言葉を掛けた時、突如言い始めた気に入ったが返事は一ヶ月待つてほしい、十万円を備え付けのシューズボックス上に置き出て行こうとした、こちらの用紙に必要事項をご記入して下さい」

「一ヶ月キープしといてくれればいいんだ」

「私の話に聞き耳をもたないソフト帽を深めに被り部屋を出て行った、窓を閉めブレーカーを落とす外に出ました、それすらもう視界にはいなかった、私は何か不審事のような、後山店長に電話したら現金は預かりとし一ヶ月待つてみよう」

「が今日現在現れていない」

一平は今でも不審がる里山さんに問い掛けた。

「隣の部屋は口伝いに聞いとるがS Aさんが入居してますよね、端っこの部屋がいいーとか言いませんでしたか」

「はい仰いました、でも商談中と説明したら眉を寄るもこの部屋で良っかお願いします、と十万円男の二日後に入居完了しました」

「その時も番号付きの鍵ボックスから部屋鍵を」

「はいそうです」

そうなんだと川島所長が口を挟んできた。

「自慢はするでもないがうちM社は数多くの駅前到店舗を構えている、空き室が出ると直ちに各店舗に振れを出し埋めるよう努める、何処の店舗でも下見に来た入居予定者を空き室に案内できるようにしている。合鍵ボックスを設置し番号は各店舗に伝えてある、空き室に入居希望者の下見はいつでも可能」

相分った、一平は返事するも問い掛けた。

「その合鍵ボックスの番号は入居予定者に分かるかな」

「無理と言えるが傍により番号を動かす手を見ていれば可能と言える」

「今までそのように近づいた人はいったんかな」

「ごく自然に下見の時は社営業がお待ち下さいと言ひ合鍵を取り出します、その時入居予定者は部屋の入り口で待っているのが常、わしの知っている限りではない」

一人だけいますと理沙が言った。

「あのピッカピカに黒光りした靴を履いた三屋さん、微かに肩が触れ悪戯でもされるんじゃないかと想えるほど近づいて来ました」

「その仕草では考えられるでもない、悪戯する為ではなく鍵番号を知る為ではなかったのでは」

一ヶ月待ったが音沙汰なし、現れたなら同等物件を世話すればいい、社に空き室情報を流すよう指示、現金は今でも店で保管していると川島所長が言った。

「一平さん黒目が異様に、刑事魂が騒ぎ始めたと違いますか」

「その十万円男、C Aさんが言ってた、ガチャガチャと音がし暫くすると荷物便の受け渡しの様な、そこで鍵をかけ元に戻し人目を避けるように去った、その男と似ている。営業にその様な人は居るのか」

「わしの知っている限りではない、里山さん、その様なのは居るかな」

「私も知っている限りでは居りません、一平さんその男が何かに」

「詐欺グループが空き室を利用し現金を受け取る事案も発生している、その男は下見をしたいと申し出て合鍵番号を調べたのではないか、そこで後日空き部屋に入り荷物を受け取った、とも考えられるが荷物便からの受取り、紛失、傷みとリスクも多い筈、では何だったのか」

「小生の黒目はそこまでしか目下の所分からん」

一平は言う。

里山女史も酒が好きなようですと聞いていますが。

「一平さんはどのようなお酒飲まれるのですか」

迷わずレミーマルタンと一平は言った。

「今は亡き裕さんが飲まれていたとか、私こないだ三鷹店同期とカクテルバーに行ったの、壁にマティーニ、映画七年目の浮気ではモンローさんが、007ではボンドさんが愛飲されたとか、飲んでみようとなつてウェイターさんに」

ウェイターさんはカクテルグラスをカウンターに二つ置いた。

「お嬢さん方、お酒は好きと見えるがこれはチョーキつい、ゆつくり御飲みください」

て言われちゃった。

「言われた通り強い、口ん中に火が付きそうだった」

「おいおいそんなもの飲んだのか、まつぐ帰れたかよ」

川島所長が声を掛けた。その後三人はコーヒーストップで酒談議に花が咲く。

帳チヨイ前一平はいつぶくの格子戸をあけた、刑事さん達のたまり場化をなしている、いかにもそれとなしに分かるような面々。

あらこの時間に来るとはおめずらしいとサイホン手にまりが言った。

「あそこの二人用テーブルしか空いてないよ」

「そこでいー、すぐに帰る、さつきコーヒー飲んできたがここのが恋しくなつてなー」

「やっぱし私じゃーなけりゃー駄目ね」

「そーじゃーないただ飲みたくなっただけ、小生にやーマティーニを二人でと、今風な女の子だっているんだ」

「それはよーござんしたね」

そんな二人のやり取りを刑事等はにやにや。

デカ長さん、とカウンターにいたGジャン着込んだ三十半ばの男が声を掛けてきた。馴染薄と見え一平は記憶をたどる仕草。

「初めまして府中署交通課稲垣巡查長です、今日は非番でコーヒーを飲みに来たしだい、元八方面白バイ隊に所属する女性隊員さんがコーヒーショップを営んでいる、しかもご主人は名うての谷端一平さんだ、何度か来ましたがデカ長さんに会えず仕舞いで今日になった」

「それはそれは有難うございます、でも小生は一市民デカ長はご勘弁、一平でいいよ、コーヒーは如何ですか」

「アルコールは苦手だがコーヒーとなるとちよいと、オーダーすると本場もんを挽きサイホンで、いけますな」

と言いながらコーヒー話や世間話。ところでデカ長いや一平さんと切り出した。

「一平さんもお存知と想いますが五月に起きたキスゲ橋からの転落死、どう想います」

「あーあの事件は知っています、新婚のご主人がMTバイク運転中誤って落ちてしまったとか」

「そーそれです、刑事課は事故と事件両方で捜査始めた、僕は事件性ありと合同捜査会議でも主張していた、そんな矢先、相谷茂樹監察官が来、この件は本庁扱いにするといい事件に関する書類一切を持ち出してしまった。僕は何で捜査も終わってないのにと眼を据え齒軋り、であると共に奥さんが訴えていた事故ではなく事件だと、慰めるかのように捜査課長が脇により言った、稲垣君、私も君と同感だが監察官があー言うとうとうもないんだ」

「その後稲垣さんはどーされた」

「もやもや感多分に残るも同僚に慰められ交通課職務に従事した、があの時の奥さんの顔が今でも浮かんでくる。一平さん、デカ長流に捜査いや調べては頂けんだろうか、暗号めいた血痕だつて気になっている」

いかが言ったらいいだろうか、考え込むも想わぬ巡查長の出現に一平の表情が緩んだ、今迄の事を稲垣巡查長に告げた。

「是非お手伝いさせて下さい、書類等は一切ないが僕の記憶ある限り当時の捜査状況を含めお話しします。必要ならば捜査調べ物も、で何から」

あいや待たれと両手で制した。

「君は現役の警察官であり妻子も居られよー、一つ間違えれば更迭も許されないその辺考慮しお願いします」

週刊平成の名刺に携帯番号を記して渡した。

「一平さんは現役時代と変わりないな、至って部下想いな所。元白バイ隊員の奥様も然る者、犯罪には人一倍厳しが部下想いと時折署内で話題に、ご夫婦が営んでいるコーヒーショップ、署内でも多くが利用している今日、ここにいる方々も警官や刑事が殆どのようなだ」

「ここは上さんのまりが仕切っている、小生はおまけのよーな存在」

「そういう言い方するから上下に関係なくデカ長流が冴えたんですね、一平さんの存在だって中々どうして」

「おいおい、その位にしてくれんか六尺一寸の体隠すところがないよ」

「本庁扱いとし書類を全部持つて行つてしまつた相谷監察官とは雲泥の差」

「その監察官は自分は知らないどんな人物」

「よう聞いてくれました、聞くところによると所轄の頃、部下がミスすれば罵声を浴びさせビクインシデント扱い、かと思えば部下が苦勞し解決した事々を全部自分の手柄にする。しかもちよつと前の言い方かなキザだ」

キザとはと一平。

「何時も色合いは僅かに変えて縞のダブルスーツを着込み、映る程磨かれ光った靴、時折ソフト帽を被りパイプたばこを愛用し上司のゴマすりは一倍、部下には上から目線も甚だしい」

里山理沙が物件下見に連れ行つた男、三屋と稲垣巡査長の言を一平は重ねていた。

「三鷹署には自分の知っている限りは居なかつた、監察官は近隣の所轄にいた事は」

咄嗟の問いに稲垣巡查長は鼻白んだ、一呼吸おいて言い出した。

「七、八年前武蔵野署に居たと聞いたがそれが何か」

「井の頭で不審な動きをし物件探しをしていた者に服装が似てるんだ」

「似てる人は数知れないと想いますが」

「言う事はもつともだ、が捜査と言うのはコンマ以下でも、可能ありと調べなければならない」

「さすがだなー一平さんは、あの監察官が居た所轄は、コンマ以下の可能性より可能性大を探し捜査しろ。大が見たらんから時は僅かでも可能性を探り見つければそこから捜査始めます、と言うもんなら何やってんだと罵声が返ってくる、叱りを受けるも分からんではないが。甲斐あって解決できれば先に言ったように自分の手柄にする、そんな管理官と大違い」

相づちを打つも稲垣巡查長に問い掛けた。

「武蔵野署に居たならばジブリの森近辺も明るいだろうし空き物件探しも容易いだろう、現在下見男とのりのCA仲間が言つてた男を監察官と断定は出来ん、がもしそーだとしたら何故に不審な動きが」

コンマ以下の可能性に一平の黒目はぎよろつき始めた、それを見て巡查長が言つた。

「そうですね、デカ長さんのサンマの黒目」

「いやーついこーなちゃうんや」

お二人様、間もなく閉店ですとまりが言い寄つた、いつの間にやら二人だけに。

「今後、僕に出来る事があれば何なりと仰せ使わさい」

「有難う、そーして頂くが無理は禁物、交通課勤務と家族サービスをお忘れなく」

じゃー又なと言ひ別れた。

毎年ながら0がいつぱい付くクリスマスプレゼントをまりに渡した。今年も後僅かばかりとなった、鳥撮り納めでもとを

パッセンジャーシートにマキを座らせポイントに向う。

鳥撮り猛者さん等は何時しながら皆思い思いのパターンで鳥さんのお出ましを待っている。

「よつご兩人」

と声を掛けるは野萱さん。

「今年度の有終の美とやらでシャッターチャンスを待っておるがお馴染さんだけや、だけどメジロさんがツーショットやスリーショットをお見せし早よう撮れと言わんばかり、素浪人殿も撮ってやつてくれんかや」

「野萱さん、自分が撮ります」

とマキが三脚を立て機材をセットし始める、上手かーできるかいな、カメラとレンズ落とすなよ一平はハラハラもん、シジュウカラとメジロが下りたと同時に連射音が響く。

「撮れたー、しかも二羽と三羽だ野萱さんどうだ」

と言わんばかり。

「マキちゃん良かったね、その感動を忘れちゃーいかん、その気持ち明日からの行動と元気印に繋がるんや。さあー次はどなた様がお出まし下さるやら、念じれば叶うかも」

「はい、野萱さん念じています」

「・・・マキちゃんは直やな、念じが通じたよコゲラさんとアオジさんが」

野萱さんがシャッターを押した、マキが遅れ時と押しまくる。時計は昼時に四半時前を指した。

「マキちゃん撮れたようじゃなー、拙者は昼飯が呼んでよる退散と致す、後は一平殿にご教授なされ」

だけんどマキは野萱に言う、

「一平はここでは最近機材も持たないしセットもしない、好きに撮れとばかり」

「ほほーそれが元デカ長さん流とでも言うか一平さんは、現役時代も決して人のせいにはさせん、任せたならば結果

はどうあれ後は小生に任せる主義、そんな訳で部下個々も多々な事案に真っ向から立ち向う事ができ、解決に導れた。そんな一平さんだ、機材だつて壊れる事だつてある、が任せたならば怒りゃーせんよマキちゃん流にセットし撮りゃーいいんだ」

「野萱さんありがとう、気兼ねなくシャッター押すよ」

マキは先程撮れた感動が忘れられないのか今か今かとその時を待っている、が鳥の出は止まってしまった。

「小生等も昼としようじゃないか」

一平が声を掛けた。はいと返事はするもマキは藪から眼を離さない。

「鳥撮りとはそう言うもんや、一日待ったとて撮れん事も多い」

一平はブツブツ独り言。マキが漸く敷物を出しランチの用意を始めた、今日もライスボールはチョーでかい、マキは皆の視線もなんのその大口開いてパクつく、遅れまいと一平も皆を見、これ美味いよと皆の方向に向き両手でかざした。

方々もパンやおにぎり等広げる、鳥撮りポイントはさしずめ野外レストランと化した。

徐に一平はマキに声を掛けた。

「捜査に否調査に待ったなし、元ピース王国事務官の転落死した松下翔平さんに繋がる事柄は未だ見つからない、今日を今年の鳥撮り納めとし明日から調査始めるよ、のりのCA仲間が言っとつたジブリの森に近いワンルームマンション、そこで不審な動向しとつたピッカピカな靴を履いた男からだ」

マキはでつかいおにぎりの梅干し入りの一角を口に頬張り、むしゃむしゃごつくん、食べたフーと息を吐いた。

昼後一時して陣払いしマキに言い始めた、

「A4大の小荷物を受け取った、と言うからジブリの森近辺へ配達する業者から調べるとすつか、業者の営業所を調べてくれ」

「そうこなくっちゃー、ガッテン任しときな」

マキを送り帰路に就いた。

翌朝、柔術道北野流の門前に一平は早馬二を停めた、マキが遅れ時と駆け出してきた。業者は四社どつから行く
と声を掛けながら名刺を一平に渡した、週刊平成ルポライター村上眞姫と記されている。

「誰に断ってこんな名刺作ったんだ」

「事が起きたら一平頼むよ」

「牛、飼ってんじゃーねーがモーだ モーえー加減にせんかい」

「「そんな起る横顔が堪らん」で」

「モー勝手にしゃがれ」

そーこーしとつたら一軒目に着いた。名刺を出した。

「年末の配送状況調査しております、お手間はとらせません、責任者さんにお話をお伺いさせて下さい」

「忙しい、相手にしておれん」

見事門前払い。

「二件目も同様だね元デカ長さん」

「何時もの事、諦めは禁句、ただ前向きのみ」

三軒目へ二人はハイタッチ、カウンター越しで受付お嬢さんに名刺を出し用件を言う。

「そう長くはないと想います、待って頂ければお話をお伺いいたします」

「お願いします」

スチールディスクが並び慌ただしき漂う事務所奥の衝立裏に通された、休憩室も兼ねていますと八脚ほど食堂用の
テーブルがあるところに通された、三人が休息している、二人はそこから離れたところで丸椅子に腰かけ待った。

「いやーこんなむさ苦しい所でお待たせして申し訳ございません」

白いものがちらほら眼につくが凜とした四十絡みの男が入って来た、差し出された名刺には宅急便三鷹営業所、所長長沼健二郎と記されている。

「所長の長沼です」

「週刊平成でルポライターをしている谷端です」

マキも遅ればせながら名刺を。

「暮れのお忙しい中、時間を作って頂きありがとうございます、手短に済ませますお願いします」

「自分は体を動かすのが趣味のようなもの。所長職以外はこうして所内で皆と作業しています、さつきリフトを操作していたらお二方が事務所に入って行ったのを見ました。

「小荷物の出し入れでも無いようだな、では保険の勧誘さんかなそう想っていたら事務員さんが名刺を持ってきお会いしたいと告げた、年末の配送状況を聞きに文屋さんが俺に、正月まで僅か最後の追い込み、自慢ではないが所内一丸となつて誤配破損遅延なく熟している、週刊誌は文屋さん次第で記事は書けるどんな記事になるか楽しみだ会ってみよう」

と言つて長沼所長はベンチシートに腰かけた、なおも話し始める。

「高校卒業時、自分は仕事に就きたいと想うが親の反対で大学に入った、三年のとある日、宅急便アルバイト募集広告を見た、これが運の尽き右も左も分かんないまま真心と的確にと共に宅配を始めた、住宅地図と首っ引きで日々が過ぎる。大学を卒業する頃広範囲に早く言えば目をつむつても配達できるまでになった、担当地域ではすれ違いざまに手を振ってくれるまでになった、と同時にお客さんは何をしている人、送られた方はどんな人何をしている人、個人情報だ聞く訳にもいかない、ご主人宛の小荷物をご家族に渡す、お父さんは学会で留守です私がサインします等々、と言う事は医療関係か研究者だ、睨んだ通りそう言った事が度重なり自慢話になってしまうが顧客さんを見る眼が肥えてきた、常日頃初対面の会話でこの人は偽りを言っているなと想えるようになった。

就職も決まらないまま卒業、国の親をよそにアルバイトを続けた、いつしか正社員に登録され三十でこの所長に納まる、小荷物の受け渡しは相手の眼を見て真心を持つ、作業は迅速かつ的確には基より自分流で良いから日記をつけさせている、たかが小荷物の受け渡しだがお客様と接する時だ、この時が我が社の売り上げに響く、お客様の胸の内を察して応対するように心がけている」

「いやー長沼さんのルーツとくと拝聴しました」

で小生等の本題に入らせて頂きますと一平は切り出した。

「あいやまたれ」

と所長が言い出す

「谷端さんにはウソ偽りがございますなー」

一平とマキは顔を見合わせる。

「と申しますと」

「自分なりに人を見る眼があります、あなた方は週刊平成とは何ら関係ない、その眼と仕草で分かります、谷端さんは刑事かそれに類したお方、お嬢さんは良く分かんが記者さんではない、谷端さんは刑事仕草とでも言うかそれを無理に隠そうとしている、落ち着きのない眼が言っています。想った通りですな、しかしそんな事はどうでもいい来所の目的は」

一平は完敗と言った表情で所長を見つめた。

「今は一市民ではあるが元三鷹署の刑事谷端一平です、退職後は趣味と健康を兼ね海に山にデジカメ様のお供をしています、こっちは柔術道北野流道主村上一太郎さんの孫、村上眞希です、幼稚園で保育士をしているが暇を見つけては事毎に行動は共にしています」

「女性でしかも小柄ながら大男を倒せる技師が居る、と聞くがここにおられる方ですか」

「褒めるとその気になるそれくらいで」

「仲の良い事ですな、羨ましい限り」

「昨年五月、府中市の浅間山キスゲ橋で事故死したピース王国の書記官松下翔平、その奥方紀子さんと十一月に出会った、翔平は事故死ではない殺されたのだと小生に迫った」

「その件と当配送所と関係があるとしても」

「いや、そうではない、目下の所小生等は初動捜査いや調査中で確かなのは掴んではない、ご存知と思いますが刑事と言うもんは足を棒にして僅かながらの手掛かりを求めています。ところで所長さん、関係あるかは不明やが昨年五月、ジブリの森近くのワンルームマンションへはこちらで配達しておりますか」

「はいしております、その地域の配送は大前が配達しております」

と言いつつ席を離れる、程なくして戻った。

「大前は配送中ですが間もなく戻るでしょう、お茶でも飲んでお待ちください」

雑談しているとお待ちせしましたと大前配送員が入って来た、所長は一平とマキを紹介する。

「業務中お呼びたせし恐縮です、早速お伺いします、昨年五月ジブリ近くのマンションの二階の端っこの部屋に配達されたかお聞かせ下さい」

「うーむなんせ日に百件を超える配達、記憶が今一」

「ならば配送記を持ってこい、日々付けとるんだろう」

所長は言う。

程なくして大前配送員は201とか五月とか言いながら戻った。

「確かに自分が配達しています、5月27日と7月5日、この二回です自分の休みの時は別ですが」

「二回配達したんですね間違いありませんか、受け取った人の特徴は」

「配送記にはピッカピカな靴にダブルのスーツ、ソフト帽を被り声を発せず人目を避ける仕草ありと記されている」

「小生等が得た男と類似している、その他何かお気づきはありませんでしたか」

大前配送員は記憶を辿るような仕草しきり。

「そう云えば厚紙で包装してあったがA4サイズ位で4センチ厚、中身は書類と記されていました。名前は受領書がありますからそれを見れば分かります」

話が終わるや長沼所長が立ち上がった。程なくして束ねた受領書を持って来めぐり始めた。

「5月27日だったな・・・あったぞジブリマンション201 荒木田輝夫12時から午後2時の時間指定、差出人は港区白金台2丁目 夏目浩二と記されている、受領欄には楷書で荒木田のサイン、大前君これだな」

「はい、そうですと想い出した、おかしな点がドアを開け受け渡し時全容は確認できなかったが例え男のワンルームとは言え生活感がまるつきりなし、上がり端にはマットもスリッパもない、冷蔵庫も洗濯機もない無論カーテンも下がっていない、さしずめ空き部屋同然」

一平は話を聞きつつ黒目が異様な動きを始めた、一呼吸おいて問いだした。

「7月5日の時はどーだったんですか」

「それが今想えばおかしな事でした、空き部屋同然の部屋への配送が入った、今度は午前8から10時でした、送り人と受取人は同じ、前回から一ヶ月と一週間たっている、カーテンも下がり家電も備えられたかな等々想いながらマンション脇に停めた、例によってA4代の小荷物を小脇に抱え201号室に向かおうとした、背後からご苦労さんです荒木田ですと声が掛かった」

「急用の電話が入った、出かけるところです、私宛の荷物があったらここで受け取ります」

「ピッカピカな靴、ダブルのスーツにソフト帽の男は言った」

と大前配送員は付け加えた。

「荒木田さんに間違いない、部屋の前ではなく路上での受け渡しでした、慌ただしくサインし大きな黒いバックに小荷物を入れ速足で駅方向に消えました、その後表に回り201号室の窓を見た、カーテンが付いていた、5月27日は越してきて間もない、今は生活感たつぷりだろう、何の疑いもなく配達を終えた」

長沼所長は刑事ドラマの愛好家でもある、部下の言に興味津々。

一平さん、いや谷端デカ長さん、我々は惜しみなく協力させて頂きますと長沼所長言った。

「有難うございます、捜査は情報漏れが敵と言っても過言でない、長沼所長さん大前配送員さんにくれぐれも宜しくと」

相お分かり申したと二人は相槌を打つと長沼所長は言い始めた。

「私等は先ほど言った通り可能な限り協力は惜しまない、今後も事故死に繋がると想われる情報提供はもとより何なりとお聞き下さい、そして一日も早く真相究明をお願いします」

これからの捜査協力と業務中にも関わらず時間をとってくれた二人にお礼を申した、一平はマキを見、お暇しようと立ち上がる、傍らでマキも深々と頭を下げ何故か所長ではなく大前配送員とハイタッチ。